



2025年5月
第761号

日本基督教団 平塚教会
発行人 平塚教会
編集人 中山洋司
〒254-0045 平塚市見附町6-18
電話 〇四六三(32)八八三一



教会は仲良しサークルではありません

平塚教会牧師 北川一明

ただひたすら注意してあなた自身に十分気をつけ、目で見たことを忘れず、生涯心から離すことなく、子や孫たちにも語り伝えなさい。あなたがホレブであなただの神、主の御前に立つた日、私は私に言われた「民を私のものに集めなさい。私の言葉を彼らに聞かせ、彼らが地上に生きる限り私を畏れることを学び、またそれを子らに教えることができるようにしよう」。

(申命記四・9、10)

平塚教会役員会では、二〇二五年度の活動目標として教勢の回復を目指すことを第一に考えました。昨年度中に検討した伝道・牧会の諸方策の具体化を目指すことを教会総会に提案します。

教勢がふるわなくなっただのはコロナ禍以来です。しかしコロナのせいではありません。他の諸々の制度や

習慣も同じです。コロナ禍までは表に現れにくかった問題がはつきりしたに過ぎません。いずれは来たであろうことが、コロナ禍によって早まっただけです。ライフ・スタイルが変化したので、過去のキリスト教会のありかたでは教勢は維持できません。教会は新しくならなければなりません。

教勢の回復がないと教会活動は持続不能となり、信仰を保つことが困難になります。教勢回復には礼拝出席と会員数を増やすことが必要です。ただ教勢を回復させるのは、そうでない私たち困るという「自分の都合」ではありません。それでは伝道される人にとっては迷惑です。伝道は、信仰を知らない人に幸せを届けるためです。それによって神の栄光を世に示すことができ、その結果、伝道する私たちが神に愛され信仰の初穂とされた喜びを確かに行うことができます。そのため神は私たちに伝道を命じているのです。そういう意味で、二〇二五年度の標語(案)は「永遠の神の業に参与する」としました。

平塚教会はもう新しくなり始めています。右の通り「ライフ・スタイルが」と分析していること自体が、その証しです。昨年度の役員会は今後の対応として数

目次

教会は仲良しサークルではありません
牧師 北川一明 …1

総会資料から教会の現状を読む …3

皆様宜しく願います 中谷良也 …3

編集後祈 …4

十の項目を考えました。私たちの間で既に新しいことは始まっています。そこで二〇二五年度の年間聖句は「見よ、新しいことを私は行う。今やそれは芽生えている（イザヤ四三・19）」としました。

それにしても課題聖句とは真反対の内容の聖句を冒頭に掲げました。古い信仰を語り継ぐという内容です。米歴代大統領のオバマ、ケネディ、トルーマンに引用された神学者の祈りがあります。変えることのできないものを受け入れる平静と、変えることのできるものを変える勇気と、二つを見極める知恵を神に求めたラインホルト・ニーバーの祈りです。教会を、変えるべきでない本来のものを知らずに新しくしたら、教会としての存在意義がなくなります。役員会では、このところ毎回のようには教会財政が厳しくなった現状を話し合っています。その中で十分の一献金など、信仰生活の基本ともいふべきことが「必ずしも信徒のみなさんに知られていない」という指摘がありました。それらは洗礼を受ける際に教えられたはずで、ですから私はみなさんがご存知のものと思い込んでいました。

「教会は仲良しサークルではありません」という信仰の基本から出た言葉もそうです。私は言い古された、みなさんが聞き飽きてうんざりしている言葉だろうと思っています。神学校でも神学生たちが盛んに言っていたし、神学生として出席していた教会では、よくご婦人がたが「仲良しサークルではないのよね」と言っておられたからです。

しかし今考えてみれば、神学生をつかまえて「仲良しサークルではないのよね」と念を押す信徒さんがたは、きちんとした信仰生活のできているかたちでした。教会が仲良しサークルになりかけていて、それを正せないもどかしさを感じていたのでしょう。大勢が言うものだから、私は誰もが知っていることと思い違いをしていたようです。

礼拝遵守についても献金についても、それらの大切さは洗礼の際に教わります。怠ってもただちに目に見えたバチが当たるわけではありません。それで忘れられてしまふのでしょうか。かつては先輩信徒が教会生活の中で口を酸っぱく言い続けてくれました。そのうちにそれらが自分を救うためにいかに大切かが分かるようになって

た人も多いのかもしれませんが。

今は、肉親、家族以外には耳障りの良くないことは言わない時代です。教会員同士が信仰の家族ならば諭し合うはずですが「信仰の家族」は建前になってしまったのでしょいか。キリスト教信仰の基本が継承されなくなっているようです。

ついでには毎回とは言いませんが、『おとずれ』の本欄でキリスト教信仰の基本のよいなことを書くことにしました。耳の痛いこともあるでしょうが、自身の救いに必要です。

今回は「教会は仲良しサークルではない」という言葉を取り上げました。もちろん仲が悪いよりは良いにこしたことはありません。もともと本来の役割が機能している教会なら、信徒同士の仲が悪くなることはありません。教会の本来の機能とは、楽しい人間関係ではありません。永遠の命に与る救いです。肉体の死が決定的な絶望ではなくなるのが教会の信仰です。仲良くすることが目的のようになれば永遠の命の希望は忘れられます。それで先人は、教会員同士が人間的な親しさを喜ぶことを警戒したのです。

皆様宜しく願います



転入された中谷良也兄
(クリスマス祝会にて)

母方の祖父母が明治生まれの熱心な信者で、その娘Ⅱ母と叔母達、一家七人全員クリスマスチャン。父は私が九歳の時に出走したので、母の家族と共に育った。文字通り讃美歌を子守唄に、そして教会付属の幼稚園に通い、五歳のとき牧師の息子と友達になり教会で遊んでいた。

キリスト教主義の高校に進み、何も疑問に思わず十七歳の時洗礼を受けた。自分から求めて辿り着いたわけでなく、受動的に当然のようにキリスト教の世界観を受け入れたに過ぎないが。

転機は大学入学時。学内の寮の手続きが難しく、代わりに外部の学生寮に入った。そこはアメリカの極端な福音派の施設で、同室者から朝晩に「祈りましょう!」と促され、夕食後に聖書研究と祈禱会。禁酒禁

煙、品行方正、門限九時、外泊禁止、部外者との面会は食堂で…。しかし窮屈さよりも衝撃だったのは、住人の狂信的で異様な言動。聖霊が見えるなど怪しい事を言う、遠いところを見つめる虚ろな目、カルトさながらの危うさ。

キリスト教はこんなに怪しげなものだったのか。そして改めて自分を眺めてこれは何か違うと思った。

そこは三ヶ月で出て、同時にキリスト教とも距離を置くことにした。所属教会は同志社系の中道だったが礼拝に行くのも止めた。そしてキリスト教は辞めると宣言もした。ところが縁は切れることなく、大学で中世キリスト教神学や、キリスト教図像学など、外側からキリスト教に触れていた。三年も経つと、讃美歌と聖書が恋しくなつて教会に戻っていた。以前のように盲信することはないが、以来疑問を持ちながらも教会に通っている。何しろクリスチヤンの家庭で育ったから世間一般と価値観が合わない。近所付き合いが薄い。神社は国家神道の「前科」があるから拒否。お祭りに参加しないメ縄を断る…という訳で地域には馴染めず交遊関係は教会が中

心だった。

一度は棄教した不信心者だがそんな生い立ちと屈折を経て、やはり居場所はこちらにしかないという結論に落ち着く。「キリストに捕らわれる」と云われる通り。この先も自分は何者なのか問いながら人生を送るのだろう、例えば遠藤周作氏を道案内に。

平塚には全く縁が無く教会の皆さん以外には知り合いは殆ど居ません。この通りのふつつか者ですが皆さんご指導ご教示のほど宜しくお願いいたします。

総会資料から教会の現状を読む

コロナは、2019年12月中国湖北省武漢市で発見、日本国内では、2020年1月に一例目の感染が発表されました。そして瞬く間に広がり、集会や宴会の自粛・感染を絶つ工夫等、コロナ禍という社会現象を生み出しました。

平塚教会でも皆様のご理解とご協力を得ながら対応を進めてきました。今ではコロナ禍も収まり、コロナ禍以前に復帰しよ

	コロナ禍以前 2018 年度末	コロナ禍中 2021 年度末	コロナ禍後 2024 年度末
現住陪餐会員	144 名	130 名	113 名
・主日礼拝(週)出席	68 名	30 名	41 名
・祈祷会(週)出席	14 名	7 名	8 名
・教会学校(週)出席	11.3 名	6.9 名	3.2 名
総収入(年間)	13278 千円	11342 千円	10240 千円
・月定献金	8187 千円	7423 千円	5539 千円
・礼拝献金	2954 千円	1739 千円	1818 千円
・特別献金	1434 千円	1992 千円	2519 千円
・会堂維持献金	1454 千円	1181 千円	587 千円

うという動きが始まりました。しかしコロナ禍の渦は、少子化や高齢化現象そして社会格差をも包括して複雑な様相を呈してきました。主によって建てられた平塚教会も例外ではありません。

そこで平塚教会では、何が起ころうとしているのか、コロナ禍以前(2018年度末)・コロナ禍中(2021年度末)・コロナ禍後(2024年度末)の総会資料から現状を考察してみました。

一 現住陪餐会員数・主日礼拝出席者数・祈祷会出席者数・親子礼拝(教会学校子ども)出席者数はともに減少しています。ただし、コロナ禍中(出席率33.0%)の主日礼拝出席者数はコロナ禍前(出席率47.2%)と比べて半数以下となりましたが、コロナ禍後(出席率36.3%)はだいぶ回復してきました。

二 教会財政についてですが、コロナ禍後の全収入は、コロナ以前に比べて300万円の減収となっています。項目別にみると、月定献金は42.4%減、礼拝献金は48.5%減、会堂維持献金は59.7%減、特別献金は75.7%増となっています。

特別献金が、コロナ禍中後も増になっていますのは、この間に天に召された方々のご家族の皆様からの献金が大半を占めております。

私が初めて役員に就任した頃、年度末になると先輩の方から「牧師謝儀は、一年間の献身と祈りに支えられた月定献金からお渡しできるようにしたいものだ」と言われたものです。

会堂維持献金については、4月13日付週報に、「会堂維持献金をお捧げください」と題して次のような文が掲載されました。

『会堂建築から19年を経、設備の更新や補修が増えております。与えられた教会の会堂を維持することは、教会籍をいただいているもの大切な務めです。役員会では、これまでこうした献金の考え方について、お知らせが不十分であったことが反省として挙げられました。会堂献金にご協力ください。』

さて教会員の皆様は、今回お示した上段資料の数値をどう読み取り感じるでしょうか。

(※出席率＝主日礼拝出席÷現住陪餐会員)

【編集後祈】

おとずれ5月号は、教会総会の日の発行となりました。コロナ後のこれからの教会活動に向けて、役員会では様々な課題が話し合われています。今回の「総会資料から教会の現状を読む」は、平塚教会が存続するために避けて通れない課題です。主とともに永久に歩み続ける平塚教会になるために。

(編集子)